

氏名	姜 在 彦 カン ジェ オン
学位の種類	文 学 博 士
学位記番号	論 文 博 第 150 号
学位授与の日付	昭 和 56 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当
学位論文題目	朝 鮮 の 開 化 思 想

(主 査)  
論文調査委員 教授 島田 虔次 教授 今津 晃 教授 谷川 道雄

### 論 文 内 容 の 要 旨

本論文は「朝鮮における自主的近代化の不在が他律的近代化＝植民地化を必然としたとする他律性史観を思想史的側面から反証」せんとしたものである。1980・3月刊，本文454ページ，索引31ページ，凡そ6章より成る。

第1章 朝鮮儒学史のなかの実学思想

第2章 「実学」から「開化」への思想的系譜

第3章 朝鮮伝来の西洋書目——開国前の西洋認識と関連して——

これら3章は，序論もしくは導入部である。三国時代における儒教の流伝，定着，高麗朝における仏教の優勢をへて，李朝（すなわち朝鮮）における最初期より最末期まで500年に及ぶ朱子学一尊の時代が到来するが，その朱子学のうちに主理派の李滉（退溪）——嶺南学派，主氣派の李珥（栗谷）——畿湖学派が政治上の党争とからまりつつ成立，四端七情理発気発の問題や礼論をめぐるの延々とつづく大論争がはじまり，儒教は現実を遊離した頹廢の様相を呈してきた。その状況に対する変通的立場よりの批判として生れてきたのが同じ朱子学ながら実事求是と政治改革とを主張する実学派である。それは李珥の系統の柳馨遠にはじまり，経世致用を主張する星湖学派（星湖は李灝の号），利用厚生を主張する北学派，の二派に分けられる。北学とは夷狄（清朝）支配下の中国といえども，学ぶべきものは学ぶべきだとする主張であるが，それには，満州族による侵略と屈辱，満州族による明朝征服，という事態をへて，表面上の事大と裏腹に，自己を小中華と誇り，北伐（北は清国）を悲願とするような尊華攘夷意識が強力に形成されてきた，という事実，また当時の中国にはジェズイットによって伝えられた西学が存在していたという事実，を知っておかねばならぬ。実学思想は18世紀末，朴趾源，丁若鏞，朴齐家らの出現によって，「華夷一也」とする世界観，士庶の職能的平等観，士の商業進出，国内市場統一と海外貿易との要望，など近代志向的性格のものに成長していったが，1801年の天主教大弾圧のあおりで殆んど致命的な打撃をうけ，以後70年間衛正斥邪思想が圧倒的支配思想となったことは，朝鮮にとって大きな不幸であった。

然しながら実学思想はウエスタン・インパクトによって，1870年代，今度は開化思想（易の開物成務，

礼記の化民正俗)として再登場する。「開化思想とは開国(1876、日本との江華島条約)およびその前後の対外的危機に対応した『実事求是』の思想」「資本主義的生存競争のなかでの富国強兵のための近代的変革をめざした思想」である。著者は開化思想としての再生の時期を朴珪寿(朴趾源の孫)が進賀正使として中国に使い洋務運動に接した1872年に求める。またこの思想を朝鮮資本主義萌芽論と直接に結びつけるよりも、むしろウエスタン・インパクトを重視する。そして朱子学の自主的展開が主体的に危機に対応したという点があくまで基本であると説いている。

#### 第4章 開化派の形成と開化運動

##### 第5章 教育的開化と近代学校の成立——その思想的・制度的形成過程

##### 第6章 新民会の活動と百五人事件——李朝末期の国権回復運動と開化思想——

朴珪寿の書齋に集った少壮兩班の間から初期開化派が生まれ、それがやがて著者のいう変法的開化派(金玉均、朴泳孝ら)改良的开化派(金允植、翁吉濬ら)に分化してゆく。前者は甲申政変(1884、明治17年)の主役、後者は甲午改革(1894)の主役となる。従来欠けていた総合的体系的な把握の試みとして、著者は開化運動を次の三期に分かつことを提唱し、それぞれの内容を詳細に記述分析する。

第1段階(1872—84)——開明的兩班少壮派を中心とする開化運動期(甲申政変)。

第2段階(1896—98)——大衆的政治運動としての開化運動期(独立協会運動)。

第3段階(1906—11)——国権回復運動としての開化運動期(愛国啓蒙運動)。

甲申政変については、それを単に親清派・親日派の政争と見る「朝鮮不在」の理解の非を批判し、君権変法による上からのブルジョア改革を志向したクーデタと規定している。第二段階については、少数の開明的官僚の組織からしだいに民衆の参与(公開討論会、街頭集会、国王への上言)による大衆組織(婦人・賤民をふくむ)に発展していった独立協会が議會設立運動に殆んど成功しかけて挫折させられるなど、いかに「朝鮮における民主主義のあけぼのを告げる鐘」であったかを詳述する。第三段階については、日露戦争後の軍事占領——保護条約——統監府設置——韓国軍隊解散——併合と進行する日本の朝鮮植民地化政策によっておこった反日義兵運動(武闘路線)と国権回復のための愛国啓蒙運動(文闘路線)の二潮流のうち、後者に属する合法的諸団体の活動(教育事業、新聞)を可能なかぎり同情的な見方で叙述し、また同じく後者に属する非合法結社新民会の創立、組織や教育救国活動(学会、学校)の状況、結局この秘密結社が寺内総督暗殺未遂事件としてデッチあげられた百五人事件(1911年)によって発覚し根絶される事情、を詳述する。日本や中国での洋学受容が軍事から出発したのに対し、朝鮮では教育から出発したのであり、開化運動が残した最も大きな遺産が教育であったのであるから、著者は特に第5章を教育問題に割き、私立学校(キリスト教学校をふくむ)設立の盛行せしことの意味を考え、結局この開化運動期の教育救国運動こそが「併合」後における民族教育の橋頭堡となったのだという。

朝鮮思想の大きな潮流を19世紀後半—20世紀初頭の時点でもとらえるならば、衛正斥邪思想、開化思想、東学思想の三者であろう。第一第二は兩班知識人の儒教(朱子学及びそれより展開された思想)第三は農民思想である。第一は反日義兵運動の思想であり、第三は農民戦争の思想であった。しかし、この三者はやがて開化思想を軸として相互浸透し、一つの民族主義として成長してゆく。その最初の波頭が1919の三一運動であった。

副論文として『朝鮮近代史研究』(1970)『近代朝鮮の変革思想』(1973)が提出されているが、前者の第3章「封建体制解体期の甲午農民戦争」第4章「反日義兵運動の歴史的展開」後者の第一部第1章「東学=天道教の思想的性格」は、主論文を補足するものとして甚だ有用である。

### 論文審査の結果の要旨

本論文は三つの観点から見ることができる。

1. 全篇のモチーフは「内容要旨」の冒頭に引用しておいた通りであり、いま少し拡張していえば、「朝鮮を単なる日中間のかけ橋として」でなく「独自の歴史的主体」として認識することの必要を説いたもの、といてよいであろうが、そのための論証は成功しているか。2. 同時に著者は本論文によって朝鮮思想史の新しい体系の提示を試みたものと解せられるが、その試みは成功しているか。3. 著者は作業の過程において新しい史実の発掘、叙述や、従来の諸説に対する多くの批判を行っているが、それらは妥当であり、価値あるものであるか。便宜上、3から論じてゆきたい。

史実実証の面ではただ二つの点のみを挙げよう。一は従来未詳の点の多かった新民会の実態を解明し、それと百五人事件との関連(新民会抹殺のためのでっちあげ)を確定したこと、二は燕行使たちが中国より持ちかえった中国訳西洋書(北学の重要内容)を検討して、その三分の二が天主教書でなくて科学的学術書であった、という全く意外な事実を示したこと。これらが朝鮮史学における大きな貢献であることは言うまでもない。

著者はあくまで原則的でありながら(或は、あるが故に、副論文『朝鮮近代史研究』の大陸浪人内田良平論参照)しかも甚だ非教条主義的で、そこからする従来の研究の批判は、しばしば研究者に三思をせまるものがある。最も顕著な一例のみを挙げるならば、「近代日本政治思想史において国権を否定的、民権を肯定的にみる一般的発想をそのまま近代朝鮮思想史に導入」することを戒めて「とりわけ国権が侵害されている1906年以降の状況は、国権を欠落させた民権至上よりは民権を欠落させた国権至上さえもより積極的な意味をもつ」と指摘した如きがそれである。更にこの点とも関係することで本論文の大きな特徴として言っておきたいのは、氏が絶えず中国近代史との比較に留意している視野の広さである。朝鮮人留学生と清国人留日学生の比較、亜州和親会(在日アジア諸地域独立運動家、革命家の懇親組織、章炳麟らが提唱)への朝鮮人の不参加、朝鮮で崇拜され読まれた中国人は圧倒的に梁啓超であり章炳麟らの革命派は殆んど一顧もされなかったことや、少数民族につねに同情的で帝国主義に対して敏感であった梁に対し革命派は朝鮮侵略主義の急先鋒黒龍会と密接であり朝鮮の命運に対して極めて冷淡であったことの指摘、などは、必ずしもすべてが目新しい事実のみではないにしても、やはり中国近代史研究者の留意を促すに足るものであるし、開化思想家=運動家を中国の例から示唆をうけて変法的、改良的の二つの型に分類したことが本論文のハイライトたる第4章の叙述を精彩あらしめていること、特に人民大衆と結合した独立協会の運動の方が中国の変法運動より一步前進した型態であると論断したこと、などは、やがて東アジア近代化史の構想に対して大きな貢献をなすであろう。

ところで、冒頭にかかげた設問2は、いかに答えるべきであろうか。この点については事柄の性質上設問3に対するほど具体的に答ええない憾があるが、しかし開化思想のみが近代化を担いうる思想であり、

その系譜は人的にも思想内容的にも主流朱子学→実学→開化思想と展開してきた，そこに一貫してはたらいっているのは，変通，実事求是，華夷一也，という三つの原理である，という体系提示の試みは，ほぼ成功していると認めてよい。さらにまた設問1もほぼ肯定的に答えられるべきであることは，独立協会の議会設立請願運動の経緯に照らして知ることができる，すなわち本論文は所期の目的をほぼ達していると評価して差支ないとみとめられるのである。（もっともこの点に関しては，非ヨーロッパ世界の近代化に固有な原理的難問が存在することは周知の通りであるが，いまは問題外としておく。）

もちろん，本論文にも不満の存することは免れない。たとえば，実学はなお未だ朱子学内部のこと，いわば朱子学の支流として理解するとしても，開化思想もやはりそうなのであるかどうか，明確な説明が見られないこと（此は必ずしも形式的な疑問ではなからう），実学者たちの経学説についての解説が為されていないこと，中国の例から推して留学生についてはいまま少し詳説してほしかったこと，などがすぐ思いつく不満である。しかしそれらは決して本論文の価値を左右するものではない。

よって本論文は，文学博士の学位論文として価値あるものとみとめる。